令和５年度　兵庫県立こばと聴覚特別支援学校　各学部・分掌部重点目標に対する評価

学校経営の重点	＊幼児期の教育は、その後の学校教育全体の基盤を培う役割を果たしており、本校は、聴覚障害幼児の早期教育を使命とする特別支援学校である。 ・幼児期にふさわしい生活を通して、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」「障害による困難を改善・克服するための力」を育む。 ・家庭と連携して心の基盤を形成し、様々な人々との交流や、家庭ではできない豊かな経験ができる場とする。 ・一人一人の発達の程度や特性、障害の程度に応じ、保有する聴覚や視覚的な情報を十分に活用し、言葉を用いて人との関わりを深め、言葉の習得と概念の形成を図る。
（ア）	聴覚に障害のある幼児の心身の調和のとれた発達を促すための教育的支援を行う。
（イ）	幼児一人一人の実態把握を的確に行い、関こえや発達の課題に即した指導を通して、幼児の個性と能力の伸長を目指す。
（ウ）	家庭と協力をして教育を進め、受情に満ち心の通い合う育児が行えるよう、保護者の支援を行う。
（エ）	保有する聴覚や視覚的な情報などを活用し、興味や関心をもって取り組むことのできる活動を創意工夫し、様々な経験を積ませながら言葉を習得できるようにする。
（オ）	社会・文化・自然などに触れ、幼児の自発的な活動としての遊びや様々な人々との交流や、発達段階に応じた学習形態や指導内容を工夫した食育、防災や安全教育等を通して、生きる力の基礎を培う。
（カ）	こばと聴覚支援センターの発足により、関係機関や地域等とより一層連携し、聴覚障害児の早期教育・支援に取り組み、聴覚障害児教育への理解・啓発を図るとともに、開かれた学校づくりを推進する。

自己評価基準　A達成している　B　おおむね達成している　Cあまり達成していない　D達成していない

学部分掌	学校経営の重点		評価		
	各部の実践目標	成果と課題	各部評価	校内評価	校内評価グラフ
保育相談部	（ウ）家庭と協力をして教育を進め、受情に満ち心の通い合う育児が行えるよう、保護者の支援を行う。				
	家庭での子どもの様子をおやこ日誌として保護者が記録し担任とやりとりをすることを通して、保護者との連携を深め、支援の充実につなげる。	今年度よりおやこ日誌の様式と活用方法を変更した。新しいおやこ日誌のやりとりにより、学校でしたことを家庭で話したり、もう一度やってみるなど連続性のある取組につながっている。家庭での様子も知ることができ、連携を深めることができた。今後、保護者の意見も聞きながらよりよい日誌の形式を検討し、活用をすすめていきたい。	B	B	
	月１回程度学級懇談を設定し、保護者同士の交流を図ったり研修の機会としたりする。	月１回程度、年間7～8回の午後の会(たんぽぽの会、すみれの会)を計画していたが、5回（1歳児）～6回（2歳児）しか実施できなかった。内容は、保護者研修と学年懇談。弁当日を設けることで、保護者同士がゆっくり話をし、交流する時間がとれるので、もう少し回数を増やして、今後も続けていきたい。	B	B	
幼稚部	（ア）聴覚に障害のある幼児の心身の調和のとれた発達を促すための教育的支援を行う。				
	他学年との遊びや給食など異年齢での保育を計画的に設定し、友達や先生とのやりとりを増やしたり、協同性や道徳性を育んだりする。	なかよしあそびやなかよし給食等を計画的に設定し、取り組んだ。普段のクラスでは経験できない大集団での活動で、協同性や社会性等、多くの力を育めた。身近な友だちとの関わりを深めるため、ペアの友達と行動する機会を確保できるよう、取り組みを考えたい。	B	B	
自立活動部	（イ）幼児一人一人の実態把握を的確に行い、関こえや発達の課題に即した指導を通して、幼児の個性と能力の伸長を目指す。 （エ）保有する聴覚や視覚的な情報などを活用し、興味や関心をもって取り組むことのできる活動を創意工夫し、様々な経験を積ませながら言葉を習得できるようにする。				
	【3歳児発音遊び・4・5歳児発音個別】幼児の実態に応じて、発音の基礎となる口・舌の動きや呼気などの発音要領の練習に取り組み、呼気の習熟や発音要領の獲得を目指す。	聴能担当やクラス担任と、幼児の聴こえやクラスでの発音の様子等、情報を共有しながら、幼児の実態に応じて呼気の習熟や発音要領の練習に取り組んだ。次年度はさらに密に連携を取りながら、幼児一人一人の実態により合わせた課題に取り組みたい。	B	B	
	【5歳児聴能個別】幼児の実態に応じて聞き取りやすい環境と聞き取りづらい環境の双方を体験させ、どのようにすれば関こえが改善するかを遊びや疑似体験を通して考えたり気づいたりできるようにする。	雑音下やマスク越しの会話などを通して、聞き取りづらさを経験したり、聞き取りやすくするためにはどのように行動したり、助けを求めたりしたら良いか等を練習した。その場では理解することができるが、普段の生活でも助けを求める、行動できるかが課題として残っている。次年度は基本的な行動や声掛けを一覧にして掲示することで確認しやすい環境を設定する。	B	B	
聴覚支援センター・支援部	（ア）聴覚に障害のある幼児の心身の調和のとれた発達を促すための教育的支援を行う。 （カ）こばと聴覚支援センターの発足により、関係機関や地域等とより一層連携し、聴覚障害児の早期教育・支援に取り組み、聴覚障害児教育への理解・啓発を図るとともに、開かれた学校づくりを推進する。				
	[聴覚支援センター] ・こばと聴覚支援センターだよりを発行し、保護者や教員向けに聴覚障害に関する知識等の情報を発信する。 ・主治医や言語聴覚士、療育機関等と事例検討会や情報交換を行うなど連携をより密にし、一人一人の支援の充実を図る。	・外部に向けて、聴覚支援センターのチラシを作製することができたが、内部に向けての聴覚障害に関する知識などの情報を発信することができなかった。現在の体制でも情報を発信できる方法を模索していきたい。 ・医療機関や療育機関に訪問するなどして対面での情報交換の機会をもつことができた。引き続き各機関との連携を密にし、一人一人の支援の充実を図っていきたい。	C	C	
	[支援部] 個々の幼児の実態に基づき、保護者と連携しながら進路選択を考えてきけるよう、進路支援計画に基づき進めていく。	・今年度は進路相談会を実施し、希望する保護者と懇談し保護者のニーズを汲み取るよう努めた。今後も進路支援計画に基づき、保護者との連携を深めていきたい。	B	B	
総務部	（ア）聴覚に障害のある幼児の心身の調和のとれた発達を促すための教育的支援を行う。				
	・儀式など学校行事の校歌斉唱時に、幼児が前で歌や手話の見本をする機会を設定し、達成感を味わったり、他の幼児の意欲や関心につなげたりする。 ・各種防災訓練の実施時や事前事後指導において、幼児の実態に合わせて絵カードや文字等の視覚情報を活用し、考えたり行動したりなど命を守ることを意識できるようにする。	・5歳児が、手本として幼児や保護者の前で校歌を歌う事で、5歳児は達成感を感じ、他の幼児にとっても、学年が上がることへの期待感に繋がったように思われる。次年度も、幼児の実態に合わせて、達成感を感じられるような取り組みを考えていきたい。 ・水害避難訓練では、年齢段階に応じて、洪水の動画を視聴したり、総合避難訓練では、煙を炊たいたりして、臨場感のある訓練を行うことができた。次年度は、より般化できるよう、事前事後指導に使用した教材を等を共有していきたい。	B	B	
教務部	（イ）幼児一人一人の実態把握を的確に行い、関こえや発達の課題に即した指導を通して、幼児の個性と能力の伸長を目指す。				
	・各学年で幼児の実態把握を的確に行い、個に応じた指導目標や内容、支援方法を検討し、個別の指導計画を作成する。 ・校務支援システムを活用し、個別の教育支援計画を作成する。	・教員にむけて、個別の教育支援計画および個別の指導計画作成についてのミニ研修を行った。同時に、校務支援システム活用法の説明会も行い、個別の教育支援計画の作成に役立てた。今後は保護者との情報共有のための資料作成し、教育支援計画に反映させ内容充実させていく。	B	B	
生活・保健部	（オ）社会・文化・自然などに触れ、幼児の自発的な活動としての遊びや様々な人々との交流や、発達段階に応じた学習形態や指導内容を工夫した防災教育を通して、生きる力の基礎を培う。				
	望ましい食習慣の形成を目指し、幼児が食に関して興味・関心を持つよう、季節や行事に配慮した給食の実施や、野菜の栽培活動、家庭でも行える食に関する体験活動の機会を設ける。	野菜の栽培や皮むき等、例年実施している活動のほか、数年実施できていなかったクッキングの機会を設けることができたが、学年により回数、内容に偏りができてしまった。計画的に実施できるよう関係者間で調整を行っていく。	B	B	
	子どもたちの作品を玄関壁面や研修室前に掲示し、他学年の親子がそれを見てやりとりができるように、作品の近くに作成風景を貼る。	製作の様子を掲示することで、子ども自身から発音することが増えたが、親子でやりとりをするまでには至らなかった。ゆっくり作品を見る時間が確保できず、見てもらえないこともあったため、教員から発信し、親子でのやりとりに繋げていきたい。	B	B	
	5月に校内の横断歩道を使用して、左右の確認や歩いて渡る練習を行う。10月に交通安全教室の指導員によるシートベルトの必要性や信号機を使っての横断方法、保護者対象の講話を実施し、交通安全への意識を高め理解を促す。	5月に行った練習では、興味を持って聴き、左右を確認して上手に渡ることができた。10月の交通安全教室は、悪い見本と良い見本を実際に実物を使って提示してくれたことで、分かりすく、理解が深まった。だが、丁寧な説明であるがゆえに時間が長く年齢によっては集中が続かなかった。また事情によって参加できない保護者もいたため、全員の保護者への理解には繋がらなかった。次年度は内容を工夫しながら、進めていきたい。	B	B	
	幼児期に身に付けたい基本的な生活習慣が確立できるよう、保護者や学校医等と連携し、小学校就学にむけて個別または集団で支援する。また、幼児期に気を付けたい疾病（弱視予防や歯とのの健康など）について、学校医等と連携し保護者に対し必要な助言等を行う。	新型コロナウイルス感染症が5月に5類に移行し、日常の保育も以前に戻り生活習慣の確立への支援も取組みやすくなった。学校医や、外部機関との連携については、戻せなかった部分もあるため、次年度は増やしていきたい。	B	B	
研究部	（イ）幼児一人一人の実態把握を的確に行い、関こえや発達の課題に即した指導を通して、幼児の個性と能力の伸長を目指す。				
	保育の様子をビデオ撮影し、教員全員で視聴する。保育の進め方、教材の使い方、子どもへの関わりや言葉がけの方法等、グループで話し合って発表することで、幼児教育や聴覚障害児教育に必要な内容を全員で共有し、その後の保育で実践できるようにする。	担当クラスや経験年数で満遍なく分けてグループを設定したことで、グループ内での話し合いが深まり、全員で共有し、その後の保育に活かすことができた。	A	A	